

氏 名：阿部 オリエ

学位の種類：博士（看護学）

学位記番号：甲 第2号

学位授与年月日：令和2年3月6日

学位授与の要件：学位規則第4条第1項該当

論文題目：臨地実習における看護系大学生のケア実施に伴う看護上の判断育成に向けた臨地実習指導者の関わり-成人看護学(急性期)実習に着目して

Interaction of Clinical Instructor to Develop Nursing Judgment Ability by Nursing College Student Accompanied With Patient Care ; Focusing on Adult Nursing (Acute Stage) Clinical Practice

論文審査員：主査 河口 てる子

副査 本田 多美枝 (主研究指導教員)

副査 小山 真理子 (第1副研究指導教員)

副査 百田 武司

副査 大西 文子

論文内容の要旨

【研究の背景】

看護系大学では、育成すべきコアコンピテンシーとして「必要とさえる看護を判断すること」という、学生自身で看護上の判断ができるようになることが喫緊の課題である。学生の看護上の判断に関連して、学生の臨床判断に関する研究も散見されるようになったが、臨床判断は、達人に特有な直感的能力と捉えられている。そこで、看護学生のうちから育成すべき看護上の判断があると考え、臨地実習の場における患者への学生の看護上の判断に着目した。現在、臨地実習でのケアの指導は9割以上臨地実習指導者が行っているため、学生のケア実施における看護上の判断育成には臨地実習指導者の判断、指導を明らかにすることで、学生のケア実施における看護上の判断育成に向けた示唆を得ることができると考えた。

【研究目的】

本研究の目的は、臨地実習において看護系大学生とともにケアを実施している臨地実習指導者に焦点を当て、臨地実習指導者が、学生が行う受け持ち患者へのケア実施に伴う看護上の判断をどのように捉え、学生に関わっているのかを明らかにすることである。

【研究方法】

研究デザインは、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた質的探索的研究デザインである。研究参加者は、成人看護学（急性期）で実習指導にあたっている臨地

実習指導者 18 名である。2018 年 12 月から翌年 4 月にかけて半構造化面接にてデータ収集し、データ分析は分析テーマと分析焦点者の決定、分析ワークシートを用いた継続比較分析、概念相互の関係を検討、カテゴリーの生成、追加データの検討を行った。その後、結果図を作成し、ストーリーラインで説明した。

なお、学生の「看護上の判断」の概念が必ずしも共通理解されている状況ではないことから、「学生の看護上の判断」の概念分析を実施し、ケア実施に伴う決定を特定した。本研究は日本赤十字九州国際看護大学の研究倫理審査委員会（承認番号 18-013）及び看護学研究科共同看護学専攻研究倫理審査委員会(承認番号 18-01)の承認を得て行った。

【結果】

本研究の参加者は看護師歴平均 15.5 年、臨地実習指導者経験年数平均 6.6 年の臨地実習指導者 18 名であった。学生のケア実施に伴う看護上の判断に対する実習指導者の関わりは、ケア実施前の<学生を患者理解に引き寄せたすり合わせ>、ケア実施中の<患者の安全を前提とした上での学生とのケア実施>、ケア実施後の<学生の意識化を促し患者の状態理解へとつなげていく>というプロセスで示された。

ケア実施前の学生の看護上の判断に対する臨地実習指導者の関わりでは、臨地実習指導者は【ルーチンに基づく学生の行動計画の確認】と【患者や学生の反応に対するズレのキャッチ】を契機とし、学生の解っていないを踏まえた上で【患者の状態理解に向けて学生を揺さぶる】という行動をとっていた。この行動には【実習目標を踏まえた学生の自己学習の促進】が影響を与えており、患者の状態に応じた【学生を患者理解に引き寄せた上での方法の決定】を行うに至っていた。その後、【学生の主体的な実施に向けて万全の整え】を目指しながら学生に関わっていた。

ケア実施中の学生の看護上の判断に対する臨地実習指導者の関わりでは、【患者の安全が最優先】という前提に基づき、【看護師としての即座の臨床判断】を行いつつ、学生が主体的にケアを実施できるように【見守りの下学生を放つ】という行動をとっていた。同時に【学生のおさえ時の見極め】を行っていた。

ケア実施後の学生の看護上の判断に対する臨地実習指導者の関わりでは、【学生の無意識を意識化させる】【学生のネガティブをポジティブへと転換させる】【患者の過去・現在・将来を見据えた状態の可視化】を行いながら【学生の知識と患者の状態をつなげていく】関わりをしていた。同時に、【学生を手放すタイミングの見計らい】その後【学生の理解を踏まえ次の局面へと放つ】もしくは【時間切れによる学生のその後の把握困難】を迎えていた。

【考察】

臨地実習指導者は、ケア実施前、実施中、実施後にかけて、ケアの有無や方法に対する決定、患者の反応に伴うケアの決定を分断せず、臨機応変に判断しながら、学生へ一連の関わりを行っていると考えられた。ケア実施前には、患者の状態に応じたケアの有無や方法の決定を中心とした、学生への揺さぶりや学生が安定して主体的にケア実施ができるよう万全に整えていた。これらは、学生が主体的にケア実施することで学ぶことができるケア実施に伴う看護上の判断を見越したものであった。ケア実施中に臨地実習指導者は、学生に体験させることを重視し、学生が立案したケアを患者の状態によって変化させるといった臨床判断を行い、これらに学生が触れることで、多くの成り行きから、学生がケアの決定のてがかりをつかめるよう意図的に関わっていたと推察された。ケア実施後には、学生の思考を辿りながらつなげていくという意図的な関わりを行っており、これらは安酸(2015)が言う臨地実習指導者が、学生とともに体験を振り返り、体験の意味付けを行う行動であった。

【結論】

臨地実習指導者は、学生と患者の反応を注視しながら、看護師としての臨床判断を行い、それを学生に押し付けるのではなく、学生自身がケア実施に伴う看護上の判断ができるように、ケア実施前、実施中、実施後に学生へ一貫したプロセスを伴う意図的な関わりを行っていた。また、本研究結果より、学生のケア実施に伴う看護上の判断育成に向けては、看護上の判断自体の妥当性を検討するためにも深い患者理解と、判断するというだけでなく、継続的な学生への押さえが不可欠であることが示唆された。

論文審査の結果の要旨

本研究は、看護学教育の中で課題が多いとされている臨地実習指導において、社会から強く求められている学生の看護上の判断を育成するために、学生に実際にケアの指導をしている臨地実習指導者に焦点をあて、臨地実習指導者が、学生が行う受け持ち患者へのケアの実施に伴う看護上の判断をどのように捉え、どのように学生に関わっているのかを明らかにしようとした意欲的な取り組みである。実習での学びは、大学内でのシミュレーション教育では学ぶことが困難な生身の患者へのケアの経験であり、教育効果も大きく重要な課題である。

修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用い理論的飽和化を目指すことにより、今まで明らかにされてこなかった臨地実習指導者の関わりを可視化することができた。臨地実習指導者にとっては、学生のケア実施に伴う看護上の判断育成に向けた指導をどのように行えばよいかについての具体的な示唆を得られ、また自身の指導を振り返る際の視点となるであろう。他に、今後臨地実習指導者になる看護師にとっての教育ツールとしても活用できると考えられる。

教員にとっては、現在学生の判断能力育成が求められている学士課程において、本知見を活用し、学生の思考レベルに応じた関わりの在り方について検討する資料となる。この知見では、臨地実習指導者から教員へ継続的に関わることで、ケアの意味をより深く掘り下げることができると考えられる。また、学生が受けた刺激を臨地実習指導者から引き継いで、思考をまとめ深めていくプロセスでは、教員との協働が重要となる。

以上、適切かつ妥当な研究方法により明確な成果が得られており、その内容は看護学の研究として独自性があり、社会的な意義があると評価した。

よって、本論文は、博士（看護学）の学位論文として価値あるものと認め、また、論文内容、およびそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。